

- ① 所属名：特定医療法人弘慈会 宮古第一病院（とくていいりょうほうじんこうじかい みやこだいいちびょういん）
- ② 協会会員番号：44440
- ③ 小西 有美子（こにし ゆみこ）
- ④ 所属士会：岩手県作業療法士会
- ⑤ タイトル：被災地より
- ⑥ 本文：

3 月 11 日の大震災時、私は岩手県宮古市の病院で患者さんのトイレ介助を行っていました。激しい揺れの中、患者さんを支えながら「早くおさまってくれ」という思いでいっぱいでした。揺れが落ち着き、まだ余震が続く中廊下に出ると、病棟が暗く、非常用照明が点灯し、騒然としていました。しばらくすると病棟看護師が「魚市場が流された！津波が来るから患者さんを高いところへ上げて！」と呼びかけ、職員総出で患者さん全員を 3 階に上げていきました。3 階は入院・外来の患者さん達ですし詰め状態、泣いている患者さんもいれば、突然の事態に訳も分からずに徘徊している患者さんもいらっしゃいました。私は「病院は海から遠いからまさかこっちは来ないだろう」と非常階段から外を眺めていたら目の前の道路がみるみるうちに川と化し、いろいろな物が流れてきました。リハスタッフがその日行った対応といえば患者さんをなだめたり、食事の運搬・配膳等を行ったりしていました。しかし、心のどこかで「明日になれば電気も復活しているだろう」という気持ちもありました。

次の日出勤してみると、病院は暖房が効いておらず、非常用電源でテレビを見て、大震災の壮絶さがやっと分かってきました。私は実家も岩手県沿岸の大船渡市にあるので急いで家族と連絡を取ろうとしても電話もつながらず、だんだんと焦る気持ちが出てきました。時計は震災当時の時刻で止まっており、余震はひっきりなしに続き、外は砂埃にまみれ、とんでもないことになってしまったと心の底から思いました。

その後 2、3 日後ライフラインも復活し、落ち着いてきたところで家族とも無事連絡がとれました。しかし、患者さんの中には退院間近にして家や家族を失い、精神面での落ち込みが激しい方が多くいらっしゃいました。そのような患者さんに対して「さあリハビリを始めましょう」と言えるわけもなく、なんと言葉をかけていいのかと迷った記憶があります。2 週間後に宮古市から大船渡市へ帰るために海沿いの道を車で走っていても、ただ続くのはがれきの山ばかりで、本当にそこに人が住んでいたのかも分からないほどになっていました。

震災から約 5 ヶ月、岩手の沿岸もだいぶ復興してきました。今はがれきが撤去され、平坦な道が続いています。海もあの日が嘘のように穏やかです。震災当時、私にできたことはほとんどないのではないかと思えるほどに無力だったと感じます。しかし、この震災を通して、学ぶことが多くあったのもまた事実です。人として、作業療法士として、今後この経験を糧に邁進していきたいと思っております。